

EL17 Civilian Military Trauma



前 自衛隊中央病院(元陸将)
千先 康二

略 歴

- 1982年 防衛医科大学校 卒業
- 1985年 米国ブルック陸軍病院胸部外科 研修
- 1991年 米国スタンフォード大学医学部 留学
- 1993年 防衛医科大学校研究科卒業 医学博士号取得
- 1999年 自衛隊中央病院第4外科部長
- 2006年 陸上幕僚監部衛生部長(陸将補)
- 2009年 自衛隊福岡病院長
- 2012年 自衛隊札幌病院長(陸将)
- 2016年 自衛隊中央病院長(防衛技官)
- 2018年 8月 防衛省 退官
10月 関東信越厚生局(指導医療官)

- 2010年 The Legion of Merit(米国軍功勳章)

- 1995年 阪神淡路大震災 災害派遣2ヵ月
- 2003年 イラク政府調査団 派遣

Military Traumaは、銃創・爆傷・CBRNEという原因、不安全な環境、多数傷者・限定的資器材、不確実な後送体制という特性がある。外傷の特性を理解した上で、第一線での止血・気道確保・胸腔穿刺・鎮痛から、戦域でのDamage control surgery, 域外への後送まで、迅速・統合的に対処しなければならない。一方、全世界でテロが頻発し一般市民が多数犠牲になっており、2020年オリンピック・パラリンピックを控える日本にとっても教訓を活かす必要がある。拳銃創はあっても小銃創・爆傷経験がない我が国だが、各国の軍医総監からはサリン事件・JCO臨界事故のことを訊かれた。情報共有は喫緊の課題と考える。陸上自衛隊は「救命ドクトリン」を掲げ、受傷後10分以内の救護、1時間以内のDCSが受けられる衛生支援態勢の構築、迅速な後送態勢を目指している。全隊員にCAT(Combat application tourniquet)等を用いた救急法検定を義務付け、有事に輪状甲状間膜切開・胸腔穿刺・輸液・鎮痛処置が可能な第一線救護衛生員教育を実施、DCS教育に使用するブタ内臓を使ったハイブリッドモデル、大型ヘリ用後送器材を開発した。防衛医大研究センターでは日本初の爆風型衝撃波発生装置(ブラストチューブ)を開発し、爆傷・衝撃波損傷の研究を始めた。All Japanで対処する為にはMilitary-Civilian Collaborationが重要と考える。医官がATOMコースでDCS教育を受講。2016年の伊勢志摩サミットでは陸自の野外手術システムを会場近くに展開し、官民協力してDCSに備えた。自衛隊中央病院では毎年大量傷者受入訓練を実施しているが、今年7月は警察・消防・自衛隊・自治体・医師会が合同でCBRNEテロに対処した。多機関連携が鍵と思われた。